

毛利文香さん & 桑原志織さん 応援レポート 「シャネル・ピグマリオン・デイズ2017」 2017年8月19日(土) シャネル・ネクサス・ホール

シャネル・ピグマリオン・デイズ 第4回

東京・銀座のシャネルビル内のホール、シャネル・ネクサス・ホールにて開催されている「シャネル・ピグマリオン・デイズ」。シャネル社による、若手のアーティストに演奏機会を提供するシリーズである。

毎年5名ほどの若手演奏家を選出され、1月からの1年間に、シャネル・ネクサス・ホールにて年6回の演奏機会が与えられる。

2017年のピグマリオン・アーティスト5名には、毛利文香さん(ヴァイオリン)、務川慧悟さん(ピアノ)と、財団奨学生の2人が選出されている。

演奏会の名称「シャネル・ピグマリオン・デイズ」は、シャネル社創始者であるガブリエル・シャネル氏が「ピグマリオン=才能を信じ、支援して開花させる人」だったといわれていることからのネーミング。無名時代の芸術家達の支援を続けた「ピグマリオン」であるガブリエル・シャネル氏のスピリットを踏襲して続けられている。

ちなみに、シャネル氏が支援した無名時代の芸術家には、パブロ・ピカソ、イーゴリ・ストラヴィンスキー、レイモン・ラディゲ、ルキノ・ヴィスコンティ、ジャン・コクトーら、そうそうたる名前が並ぶ。



会場のシャネル・ネクサス・ホールは、ブランドロゴと同様に、黒と白で統一されたシックな空間。プログラムも黒を基調に制作されており、会場内には洗練された空気が流れる。



6回の演奏会プログラムは、各々のアーティストに任されている。テーマ構成や選曲も毎回興味深い。

毛利さんはこのシリーズに、「毎回ベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタを」という構成で臨んでいる。これまでの3回で、ヴァイオリン・ソナタ第9番「クロイツェル」、第5番「春」、第4番を披露。そして本日はヴァイオリン・ソナタ第1番。カップリングはブラームスのヴァイオリン・ソナタ第2番と、厚みあるプログラムに、4回目を迎えたシャネルピグマリオンデイズへの意気込みが感じられる。

本日は、財団奨学生の桑原志織さんがピアニスト。2016年12月のリクルートスカラシップコンサートで、聴かせてくれたデュオのふたたびの登場である。

客席はすでに満席。応募抽選方式のこの演奏会、毎回、多くの申し込みがある人気のコンサートとなっている。

渋めのプログラム。名曲を優美にマニッシュに



拍手の中を毛利さんと桑原さんが登場。二人それぞれ、会場の雰囲気によく合ったシックなドレス姿である。

チャンネルのこのコンサートは、着席するお客様の後方から入場し、拍手に送られながら花道を歩んで舞台上がる形式。客席は舞台の2人をぐるっと囲み、臨場感や一体感も感じられる設定となっている。

当日のヘアメイクはチャンネル社の方によるもの。演奏だけでなく、歩き方や話し方など、チャンネル社の方から「魅せる」ことについてのレクチャーもあり、「とても新鮮で勉強になります」と毛利さん。演奏だけでなく、衣装やヘアメイクなども含めて、統一感が醸し出される。

1曲目、ベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ第1番。「・・・モーツァルト的な感じもある作品です」と毛利さん。当時の宮廷楽長も務めた、師であるアントニオ・サリエリに献呈された初期の作品である(サリエリは、映画「アマデウス」で主人公として描かれた方です)。曲の冒頭から、印象的なメロディーが伸びやかに奏でられる。毛利さんのヴァイオリン、桑原さんのピアノ、二人の息もぴったり、曲想が浮かび上がるような美しい調べが流れる。

小休憩ののち、ふたたび二人が登場。マイクを持ってのトークが挟まれる。このコンサートの直前には、南仏でのカザルス音楽祭に参加してきたという毛利さん。「・・・スペインとの境に近く、色彩豊かな街でのレッスンや演奏会の日々でした。・・・いろいろなことを感じながら過ごし、とても充実していました」と掴みも上手に。



「・・・ある意味、トークが一番緊張します」と言っていた毛利さんだが、人柄そのままというか、さばさばと落ち着いたトークを進めていく。「・・・マリア・カナルス国際コンクールで2位に入賞」と桑原さんを紹介。二人の共演のきっかけは昨年12月の財団主催のリクルートスカラシップコンサート。「・・・ブラームスのヴァイオリンソナタ1番『雨の歌』でした。本日がソナタの2番。ですので、私の中では3番もいつか一緒に弾きたいという気持ちがあります」との毛利さんの言葉に、桑原さんにもっこりと微笑み返す。お客様からも「ぜひに！」とばかり拍手が沸き起こる。3番、近い将来に聴かせてもらえそうだ。

トークに続いてブラームスのヴァイオリン・ソナタ第2番。たっぷりと、しっとり。名曲中の名曲といわれる曲のカップリングに、会場の皆様も、息をのむかのように静かに聴き入る。2曲とも、数あるヴァイオリンソナタの中でもピアノの存在感が大きい曲。「・・・大変な曲だと理解しつつ、ピアニストの責任みたいなものを感じながらの演奏でした。いい曲であることと、毛利さんの素晴らしいヴァイオリンに助けられたと思います(桑原さん)」二人ともどちらの曲も初めての披露。入念にリハーサルを重ねたそう。優美でありながらマニッシュな音色が会場内に響き渡った。

アンコールにはエルガーの「愛の挨拶」。「・・・渋いプログラムでしたので、アンコールは明るく」と会場をリラックスモードに惹き込んでの終演だった。

あと2回。最後まで自分で納得のいく演奏を

終演の後日、2人それぞれに話を聞いた。

—毛利さん；

「…桑原さんと弾くことを、すごく楽しみにしていました。チャンネルのシリーズはいつも曲を決めてピアニストをお願いするという形にしているのですが、桑原さんとは、去年ブラームスと一緒に弾かせてもらい、また一緒に弾きたいなと思っていました」「…本番に向けて合わせを行う中で、学ぶこと、刺激を受けることがたくさんありました」

—非常に良く合っていましたね；

「…はい。絶妙に息があっていたと思います。会場であるチャンネルのホールを空いているときは使わせていただけるので、二人で通い、密にリハーサルを重ねました。ちゃんと時間をとって、しっかりリハーサルをしてよかったなと思いました。しかも会場で、やはり事前に会場のピアノで練習できることは、ピアニストにとって、とても大きいと思いますし、デュオとしても事前に会場でバランスを考えながら何度か練習できるのはとても贅沢なことです。安心して本番を迎えることができました」

—桑原さん；

「…チャンネルのホールは初めてだったのですが、独特の空間というか、乱してはいけない雰囲気を感じました。日常から切り離されているような洗練された感じが印象的でした。加えて、いらしてくださっているお客様方が、とても真剣に聴いてくださり、見守ってくださっているようで温かかったです」

「…ソロより伴奏のほうが緊張します。自分だけでは済まないですから。でも、空間の雰囲気がすばらしくて、緊張というより、お客様も私たちも音楽を楽しみにここにいるんだという雰囲気のもと、のびのびと弾けました」



なんと、客席には堤剛先生が。

合わせの段階から、お互い平等に意見を出し合って作り上げた本番。「…毛利さんは私の意見もとても真剣に聴いてくれました。すごく気さく、度量が大きいというか」(桑原さん)。昨年末の財団コンサート時は初対面。合わせ、初舞台と一緒に弾く過程を経て、演奏家同士ぐっと打ち解け、親しみ度合いも増したようだ。

客席には堤剛先生のお姿も。「…やはり先生はオーラがあられるというか、弾きながら『どなたかいらっしゃるな』と感じていたんです」と毛利さん。「素晴らしかったよ」とのお言葉をいただいていた。

「…同じ会場で年に6回もの機会、そして、たくさんのお客様に聴いていただけるなんて本当にないことです。4回目が終わり後半戦となりましたが、最後まで自分が納得のいくような、そういう演奏ができればいいなと思っています」(毛利さん)。

毛利さん、桑原さん、素敵な演奏でした。また聴かせてください！



<演奏会概要>

◆出演

毛利文香(ヴァイオリン)

桑原志織(ピアノ)

◆プログラム

ベートーヴェン: ヴァイオリンソナタ 第1番
ニ長調 作品12-1

ブラームス: ヴァイオリンソナタ 第2番
イ長調 作品100

◆アンコール

エルガー: 愛の挨拶

【コンサート・プログラム】

CHANEL PYGMALION DAYS

2017. 8. 19
CHANEL Pygmalion Days
PROGRAM

毛利 文香 (ヴァイオリン)
桑原 志織 (ピアノ)

2017. 8. 19
CHANEL Pygmalion Days
PROGRAM

毛利 文香 (ヴァイオリン)
桑原 志織 (ピアノ)

ベートーヴェン
ヴァイオリン・ソナタ 第1番 二長調 作品12-1

Beethoven
Violin Sonata No. 1 in D Major, Op. 12 No. 1

I. Allegro con brio
II. Tema con variazioni, Andante con moto
III. Rondo. Allegro

— 休憩 —

ブラームス
ヴァイオリン・ソナタ 第2番 イ長調 作品100

Brahms
Violin Sonata No. 2 in A Major, Op. 100

I. Allegro amabile
II. Andante tranquillo
III. Allegretto grazioso (quasi Andante)

【コンサート・プログラム】

◆ ルートヴィヒ ヴァン ベートーヴェン
Ludwig van Beethoven (1770-1827)

ヴァイオリン・ソナタ 第1番 ニ長調 作品12-1

第37回アカデミー作品賞を受賞するなど、名作と譽れ高い1984年公開の映画『アマデウス』。この映画内でモーツァルトを殺したとされる作曲家アントニオ サリエリですが、もちろん史実ではなく単なる噺話に過ぎません。サリエリは25年以上にわたって皇帝に仕える宮廷楽長を務めた人物一つつまり当時、音楽家のヒエラルキーの頂点にいた存在ではありましたが、実際のところは、才能のある音楽家に惜しまぬ支援をするような人物でした。教え子のなかにはシューベルト、リスト、チャルナーといった名前も並んでいます。

そんなサリエリに、ベートーヴェンは26～27歳にかけて作曲したヴァイオリン・ソナタ第1～3番を献呈します。更にその翌年、ベートーヴェンはサリエリ作曲によるオペラの初演を聴きに行き、その数日で『サリエリの主題による変奏曲 No. 73』(1796)を完成させるのです。サリエリに近づき気に入られたいと願うベートーヴェンの下心は明らかでしょう。実際、ベートーヴェンは1799年末から1801年にかけてサリエリに師事することに成功しています。

楽曲は急一巻一巻の全3楽章で構成されています。正式なタイトルである「ピアノとヴァイオリンのためのソナタ」からもうかがえるように、どちらかといえばピアノが主役として立ち回ることが多いがこの時代のヴァイオリン・ソナタの特徴といえるでしょう。

◆ ヨハネス ブラームス
Johannes Brahms (1833-1897)

ヴァイオリン・ソナタ 第2番 イ長調 作品100

よく知られているようにブラームスは、悪師シューマンの末っ子であるクララ・シューマンに想いを寄せていました。しかし、最終的には婚約破棄となってしまいましたが、アガーア・フォン・ジーボルトのようにブラームスの生涯には、クララのほかにも好意をこいた女性が幾人もいたのです。アルト歌手のヘルミーネ・シュビースもその一人でした。彼女との結婚をブラームスは本気で考えるほどでしたが24歳という年齢差が災いしてか、一歩を踏み出すことが出来ません。ブラームスと親交を持ったカルベックによれば、実らぬ恋の代わりになり成嫁したのがこのソナタ第2番なのだといいます。ブラームス自身の手紙からは本作が、同時期に書かれた歌曲《メロデーのように》と深い関わりを持っていることがうかがえます。実際に「ソナタ 第1楽章の第2主題」と「歌曲の主旋律」は酷似しています。歌曲のなかで歌われる「言葉に出来ない思い」は、ソナタ第2番において言葉なしで奏でられていくシュビースへの想いを代弁するかのようです。

作品全体は全3楽章で構成され、叙情的ながらも論理的に緻密に構成された第1楽章から始まり、たおやかな雰囲気と揺れ動く感情が交代して色合いを変えていく第3楽章、人生の晩秋を感じさせる第3楽章が続きます。

曲目解説：小室 敬幸 (作曲/音楽学)

【コンサート・プログラム】



毛利 文香
Fumika Mohri
Violin

2012年第8回ソウル国際音楽コンクールにて日本人として初めて最年少で優勝。2015年第54回バガニーニ国際ヴァイオリンコンクール第2位、エリザベト王妃国際音楽コンクール第6位、川崎市アゼリア賞、横浜文化賞文化・芸術奨励賞、京都・青山音楽賞新人賞受賞。
これまでに、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団、大阪交響楽団、韓国交響楽団、ベルギー国立管弦楽団等、国内外のオーケストラと多数共演。また、宮崎国際音楽祭、武生国際音楽祭、イタリア チェルボ国際音楽祭等に出演。
2016年3月には、紀尾井ホールにてデビューリサイタルを行った。
ヴァイオリンを田尻かをり、水野佐知香、原田幸一郎の各氏に師事。順理学園大学音楽学部ソリスト・ディプロマ・コース、及び北見学園音楽大学アンサンブルアカデミー修了。現在、慶應義塾大学文学部在学中。2015年9月より、ドイツ クロンベルクアカデミーに留学し、ミハエラ マーティン氏に師事。第40回江副記念財団奨学生。

現在チャンネル・ネクサス・ホール ウェブサイトにてインタビューを公開中です。
channelnexusball.jp/news/20170711_1661/



桑原 志織
Shiori Kawahara
Piano

2014年第83回日本音楽コンクール第2位、及び岩谷賞(聴衆賞)。2016年第63回マリア・カナルス・バルセロナ国際音楽コンクール第2位、及び最年少ファイナリスト賞。東京芸術大学附属高校在学中に、PTNA特級銀賞・聴衆賞・王子ホール賞、ルーマニア国際音楽コンクール第1位・オーディエンス賞、東京音楽コンクール第2位を受賞し、活躍の場を広げる。
これまでにソリストとして、アレクサンデル ラゼレフ、飯森範雄、新井力、梅田俊明、日光寺隆彦、大井翔史、十東尚宏、渡邊一正の各氏指揮のもと、日本フィルハーモニー交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、若大フィルハーモニー管弦楽団等と共演。東京文化会館、紀尾井ホールをはじめ各地でリサイタルのほか、ウィーン、プラハ、ホノルル、ソウル等、海外の演奏会に招かれ好評を博す。
現在、東京芸術大学4年在学中。伊藤恵氏に師事。東京芸術大学宗次徳二特待奨学生。江副記念財団第44回奨学生。

